

一八八六年四月二十三日(金)

プラヴリツティかニヴリツティか——ヒーランダへの教え——ニヴリツティこそよし

ヒーランダがタクルのお足をさすっている。そばに校長が坐っている。ラトウとほか、一、二の信者が時どき部屋に出たり入ったりしている。一八八六年四月二十三日の金曜日。今日はグッド・フライデー聖金曜日だ。時間は午後の一時か二時ごろ。ヒーランダはここで昼食をいただいた。タクルのたつてのご希望でヒーランダはここにいたのである。(訳註、聖金曜日——英語では Good Friday——キリストが十字架にかけられた日で復活祭の前の金曜日)

ヒーランダはお足をさすりながらタクルと話している。例によってニコニコしながら、実にやさしい話し方。まるで、子供をなぐさめているようなふうだ。タクルの病気を診るため、医者が始終来ている。

ヒーランダ「どうしてそんなに気になさるのですか？ 医者を信じて任せておおきになれば、気も静まるでしょうに。あなた様は子供なのですから——」

聖ラーマクリシュナ「(校長に向かって)——どうして医者が信じられる？ サルカル先生は言ったよ——治らないでしょうなつて」

ヒーランナダ「でも、どうしてそんなことを気になさるのですか？ なるようになるだけではありませんか？」

校長「（ヒーランナダに向かつて、耳打ちするようにこつそりと）——タクールはご自分のために心配しておられるではありませんよ。信者たちのために、体を保たそうとしていらつしやるのです」大そう暑い日だ。しかも午すぎである。竹すだれが窓にかかっている。ヒーランナダは立ち上がり、それを具合よくとのえた。タクールはそれを見ていらつしやる。

聖ラーマクリシュナ「（ヒーランナダに）——じゃ、パジャマを送っておくれ」

ヒーランナダが、彼の故郷くにで使っているようなパジャマを着ると、とても気分よく過ごすことができる、先ほど言ったのだった。それをタクールはよくおぼえておられて、パジャマを送ってくれようにとおっしゃったのである。

ヒーランナダに出された食事は良いものではなかった。米がうまく炊たけていなかったのだ。タクールはそのことを聞いて大そう気にされ、何度も何度も彼に、「おやつを食べるかい？」とおっしゃる。こんな重病で発音も思うようにお出来にならないのに、何度もそのことをお聞きになるのである。

それからラトウにまで、「お前たちも、あの米を食べたのかい？」とお聞きになる。

タクールは腰布かぶをちゃんとつけていることがお出来にならない。幼な子のように真つ裸になつておられる。ヒーランナダといっしょに二人のブラフマ協会員が来ていた。そのせいか、タクールは時どき腰布を腰のあたりに引きよせておられる。

聖ラーマクリシユナ「(ヒーラナンダに)——腰布カギルをはずしていると、お前たち、ヤバンだと思うだろう?」

ヒーラナンダ「あなた様の場合は、そんなこと何でもありませんでしょう?」あなた様は子供でいらつしやいましょう?」

聖ラーマクリシユナ「(二人の協会員、プリヤナートを指して)——あの人は、そう思いなざるよ」やがて、ヒーラナンダはおいとましようとする。彼は一兩日カルカタに滞在して、また郷里のシンド州に帰る予定だ。そこで彼は仕事をしているのである。一つの新聞を発行しているのだ。西暦一八八四年から四年にわたってその仕事をつづけた。新聞の名はシンド・タイムスとシンド・スタール。ヒーラナンダは一八八三年に学士の資格をとった。シンド州の人である。カルカタで学問を修めた。故ケーシャブ・センと頻繁に会って彼と話をしていた。タクール、聖ラーマクリシユナにお会いするため、カーリー堂をときどき訪れていた。

〔ヒーラナンダの試験——ブラヴリッティ(外に向かう心)か? ニヴリッティ(内に向かう心)か?〕
聖ラーマクリシユナ「(ヒーラナンダに)——シンドに帰らないことにしたらどうだい?」

ヒーラナンダ「はっはっはっは、おや、おや! じゃ、誰が私の仕事をするんでしょうか? どうしても私がしなくてはならない仕事があるのです」

聖ラーマクリシユナ「月給はいくらだい?」

ヒーラナンダ「はっはっはっは、この仕事からの収入は少ないのです」

聖ラーマクリシュナ「どれくらい？」

ヒーラナンダはただ笑っている。タクルは再びおっしゃる。

聖ラーマクリシュナ「ここにいればいいじゃないか」

ヒーラナンダは黙っている。

聖ラーマクリシュナ「仕事をして何になる？」

ヒーラナンダ、黙然。

ヒーラナンダはまた少し話をしてから、おいとまを申し上げた。

聖ラーマクリシュナ「こんど、いつ来る？」

ヒーラナンダ「次の月曜にシンドへ発ちますから、月曜の朝、また来てお目にかかります」

校長、ナレンドラ、シャラトたち

校長はタクルのそばに坐っている。ヒーラナンダは、今しがた帰ったばかりだ。

聖ラーマクリシュナ「(校長に)——とてもいい人だ(ヒーラナンダのこと)。そう思わないかい？」

校長「おっしゃる通りでございます。人柄がまことにおだやかで、やさしく……」

聖ラーマクリシュナ「ここからシンド(現パキスタン)まで、三五〇〇kmあると言っていたよ。そんなに遠いところから会いに来るんだ！」

校長「全く、よほどお慕いしていなければできませんことございます」

聖ラーマクリシユナ「わたしをシンドに連れていくことを、とても望んでいるんだよ」

校長「それは大へんなこととございましょう。汽車で四、五日はかかる道のりでございますから」

聖ラーマクリシユナ「三つもパスして！」(訳注——大学の三つの課程を修了したこと)

校長「全く」

タクールは少し、お疲れになられた。お休みになるのだろう。

聖ラーマクリシユナ「(校長に)——よい戸(シャッター)を明けて、それからゴザを敷いておくれ」
タクールは窓のよい戸をあけるようにとおっしゃる。それから大そう暑いので、ベッドの上にゴザを敷くようにとおっしゃるのである。

校長がウチワで風を送ってさしあげると、タクールは少しうとうとなすったようである。

聖ラーマクリシユナ「(少しまどろんだ後で校長に)——眠ったのかな？」

校長「はい、少しお休みになりました」

ナレンドラ、シヤラト、校長の三人が階下の広間の東側で話をしている。

ナレンドラ「驚いたことだ。こんなに何年も学問したのに、ほとんど何もわかってないとは——。二日ばかりの修行で至聖かみがつかめるなんて、どうして言えるだろう！ 至聖かみをつかむということが、そんなに簡単なものか！(シヤラトに)——君は心の平安を得た。校長先生も心の平安を得た。しかし僕は、まだダメだ」

校長「それなら、あなたは牛にまぐさを与えておいて下さい。私が宮殿に行きますから。それとも私が宮殿に行き、あなたが牛にまぐさを与えますか？」（一同笑う）

ナレンドラ「ハッハッハッハ、あの方（パラスハクンサチーヴ）は大覚者様はその話も聞いていましたよ。そして笑っておられた」

タクール、聖ラーマクリシュナとナレンドラたち信者の集い

午ひるすぎになった。二階の広間には大勢の信者が坐っている。ナレンドラ、シャラト、シャシー、ラトウ、ニティヤゴパール、ケダル、ギリシュ、ラーム、校長、スレシュ等。

まっ先に来たのはニティヤゴパールで、彼はタクールにお会いするや否や、タクールのお足に額をつけて師を拜した。座についてからニティヤゴパールは子供のような口調で、「ケダルさんが来ました」と言った。

（原典註）ブラフラーダの逸話（いつわ）——この物語はブラフラーダの生涯からの引用である。ブラフラーダの父（魔王ヒラニヤカシブ）はシャンダとアマルカという二人のグルを招いた。魔王は彼らに、なぜ息子のブラフラーダがハリ（クリシュナ）の名をとなえているのか、そのわけを聞きかかったのだった。二人のグルは魔王の面前に出ていくことを恐れた。そして、シャンダはアマルカにこんなことを言った。「私はまぐさを牛に与えているから、あなたが宮殿に行きなさい。それともあなたが宮殿に行っている間に、私が牛にまぐさを与えておきましょうか？」と。どっちにしてもあなたが宮殿に行けというおかしな話。

ケダルがこの前タクールにお会いしてから、もうずい分になる。彼は職務の関係でタッカに住んでいるのだ。そこでタクールの病氣のことを耳にし、お見舞いに来たのである。ケダルは部屋に入ると、タクールが信者たちと楽しそうにしておられるのを見た。

ケダルはタクールのお足の塵を額にいただき、うれしそうにその塵をとりあげて皆に福分けをした。信者たちは頭を下げたその塵をいただいた。

シヤラトにそれをあげようとしたとき、シヤラトはいち早く自分でタクールのお足の塵をとっていただいた。校長は笑った。タクールも校長の方を見ながらお笑いになった。信者たちは黙って坐っている。タクールは前三味の恍惚状態にお入りになるご様子だ。ときどき息を強く吐き出して、それを抑えようとしていらっしやる。ついにケダルに向かつて手まねでこうおっしゃった——「ギリシユ・ゴーシユといっしょに議論してみろ」

ギリシユは耳たぶの上をつねりながら——「先生！ 耳をつねっているんですよ！ 勘弁して下さい。以前はあなたがどういう方かわからなかったのです！ だから議論もしましたが——今は全く話が別です」(タクール笑う)(訳註——ベンガル地方では、悪いことをした時のお仕置きとして耳たぶの上をつねる風習がある)

聖ラーマクリシユナはナレンドラを指してケダルにおっしゃった。——「何もかも捨てたんだよ！(信者たちに向かつて)——前に、ケダルはナレンドラに言っていたんだよ。今は議論したり批判したりしているが……最後には、ハリの名をとなくて地べたを駆けまわるようになります、と。(ナレン

ドラに)ケダルの足のチリをお取り——」

ケダル「(ナレンドラに)——この方(タクール)のお足のチリをお取りなさい。それですむことです」
スレンドラは信者たちの後ろの方に離れて坐っていた。タクール、聖ラーマクリシュナは微笑みながら彼の方を眺めておられた。そして、ケダルにこうおっしゃった。——「アー、実にいい人だ！」
ケダルはタクールの内心を読みとって、スレンドラの方へ行って坐った。

スレンドラはちょっと感傷的おセンチなところがある。信者の誰かれが、外部の信者たちのところにこの別荘の費用に充てる金を寄付してもらいに行つたので、そのために大そう感情を害しているのだ。スレンドラがここの費用の大部分を出しているからである。

スレンドラ「(ケダルに)——こんなサードウさんたちのそばに、この私が坐れますか！ おまけに誰かは(ナレンドラを指す)すこし前に、出家の衣を着てブツダガヤーにお詣りに行つたのですよ。えらい、えらいサードウを見るためにね！」

タクール、聖ラーマクリシュナはスレンドラをなだめようとなさる——「うん、うん、あれらはまだ子どもなんだ。よくわかっていないんだよ」などとおっしゃって……。

スレンドラ「(ケダルに)——お師匠グル・デーヴァさまが、誰がどんな気持ちでいるかご存知ないとも……。あの方は、金が集まったからってお喜びにはならんのです。われわれの気持ちをお喜びになるのです！」
タクールはうなずいて、スレンドラの言葉に賛成の意を表された。「気持ちをお喜びになる」という言葉をきいて、ケダルもうれしそうな表情をした。

信者たちは食べ物を持参してきて、タクルルの前においてある。タクルルは舌の上にほんのすこしおのせになった。そして、食べ物ののせてあるお盆をスレンドラにお渡しになって、皆に分け与えるようにとおっしゃった。

スレンドラはそれを持って階下へいった。お下がりフラスアイドを階下で分けるつもりなのだろう。

聖ラーマクリシユナ「(ケタルに)——お前、よくわからせてやってくれ。階下へ行つて、言い合いをしないように気を配っておくれ」

モニはウチワで風を送っている。タクルルは、「お前も食べるだろう?」とモニをも階下にいつて食べるようにとおっしゃった。

日が暮れかかる! ギリシユとシユリーマ(校長)は池のほとりをぶらついている。

ギリシユ「ああ、あなたはタクルルのことを書いてるんですつて?」

校長「誰がそんなことを言いましたか?」

ギリシユ「とにかく、私はそう聞きましたよ。私にゆずってくださいませんか?」

校長「とんでもない。自分で納得がいつてからでなくてはお見せできません——それに、あれは自分のために書いているのです。人のためにじゃありません!」

ギリシユ「何をおっしゃる!」

校長「私の肉体が亡くなる時、読めるでしょう」(訳註、シユリーマ——マヘンドラ・ゲプタがこの日だけ使った仮名。「大聖ラーマクリシユナ 不滅の言葉」を出版するに当たり、著者シユリーマとして発刊しているので、

この仮名を使ったものと思われる)

〔タクールは無条件の恵みの海——ブラフマ協会のアムリタ氏〕

日が暮れて、タクルの部屋には灯りがついた。ブラフマ協会の会員、アムリタ（・ボース）氏がお見舞いに来た。タクールは彼にとっても会いたがっておられたのだ。校長と二、三の信者が坐っている。タクルの前にベル（マツリカ）とジュイ（いずれもジャスミンの一種）の花輪がバナナの葉の上にのせてある。部屋は静まりかえっている。まるで、一人の偉大なヨーギーが音もなくヨーガの瞑想に入っているかのようだ。タクールはときどき花輪を手におとりになる。お首にかけたいようにみえる。

アムリタ（やさしい声で）——花輪をおかけしましょうか？」

花輪をお首にかけてから、タクルはアムリタと沢山おはなしをなさった。アムリタが帰ろうとする。

聖ラーマクリシュナ「お前、またおいでよ」

アムリタ「はい、ぜひうかがいたいと思っております。遠いものですから——それで、始終というわけにはいかないのです」

聖ラーマクリシュナ「おいで。此処から馬車賃を持ってお行き——」

アムリタに対するタクルの限らないやさしさを見て、一同は驚いた。